

# 視線の作法 いざな —ワイルドへの誘い

五味田 幸夫

## 1. 感性の眼で見る

19世紀末、例の赤い風車の回転するモンマルトルの丘にあやしくも美しい花が開く。国境を越えた芸術家たちにも強力なインパクトを与えた世紀末都市パリ。その都市空間のもつ審美的土壌とは何か。例えば、それは画家ムンク、ルドン、ルソーに見られるように、眼に直接見える外界（対象）を写し出そうとするものではない。いやむしろ肉眼には見えない魂の神秘や、想像力が生み出した幻想の世界にある。これは aestheticism の原義である「感性の眼で見る」ことに他ならない。と同時に、19世紀まで西欧を支えてきた科学的な perspective（遠近法・透視図法）が芸術家たちにとって砂上の楼閣となることを暗示している。

文学では、「肉体の眼ではなく魂の眼で見た」（ゲーテ『詩と真実』）というテーマが底流にある。これはいわゆる Doppelgänger（二重身・分身体験・自己像幻視）に関連する問題である。シャミッソー、ホフマン、モーパッサン、H.C.アンデルセン、E.A.ボオ、ドストエフスキー、(芥川龍之介)等の作品に顕著に見られる。芸術家自身の分身体験はゲーテ、ムンク、(三島由起夫)等にも見られる。double personality を描いた R.L.スティーヴンソン。そしてワイルドも例外ではない。

この感性を呼び起こすために仮面が登場する。想像力の振幅を広める手段としていわば日常空間から非日常空間につれだす装置として、仮面が重層的な意味をもつわけである。ルドン、ロップス、ピアズリー、クノップフ、アンソール等の〈仮面〉に寓意及び象徴的表現が見られる。このように、感性の眼、死の影がつきまとう分身体験、深層の意識を呼び起こす仮面は、世紀末の特徴として照射すべきものである。換言すれば、芸術家の物を見る複眼的な眼と視線の作法にならうか。こうした視点からパリ体験のあるワイルドに熱いまなごしを向けたいわけである。

## 2. 視線の恐怖

「じっと見つめるとあぶない。何か恐ろしいことが起こる。」

ワイルドの『サロメ』を読む時、強く印象に残る台詞である。視線を一方向的に向けると不吉な恐怖が現実となって、死が死を招くといった具合に作品は展開する。若いシリア人はサロメを見つめすぎたためにナルシストのごとく自害する。ヘロデ王がサロメを見つめ

すぎたために、サロメの舞踏と狂乱を招く。預言者ヨカナーンを見つめすぎたサロメは、ヨカナーンの断首を求め、その後に自らも殺害されるのである。

特に、サロメの「見る」(see)は「愛する」(love)ということであるが、伝説の voir に相当する。つまり相手と一体化すること(愛)であり、相手を所有し物質として犯すことである。自己というものを確立し、自己という幻想に執着すれば、見る私(主体・自我)は相手(他者・客体)の主体性を奪うことでしか一体化できない。そうでなければ相手に見られることで私が私物化されてしまう。これは西欧の近代的自我(個人主義)のもつ弁証法的な宿命とも言える。が、ワイルドは、この見たいという欲望と見られるという不安いわば情念のアンビヴァラントな状態を、さながら月の魔力のごとく、サロメの感性を徹底してイメージ化し、狂気のような瞬時的な美の世界を創りあげている。少なくとも視線のもつ恐怖は『サロメ』の重要な伏線となっている。

## 3. 乱反射する視線

固定する視線だけでなくワイルドは揺れ動く視線を『ドリアン・ 그레이の肖像』の中で描いている。対象に視線を乱反射させている。言葉を換えれば、自己像幻視の多重化とも言える。画家バジルとドリアン及びその肖像画、さらに享楽主義者ヘンリー卿、ドリアンとシビル及びヘティ・マートン等、実像と虚像の関係が多重化している。このように、人間の自我の多元性や流動性の追求は、ヴィクトリア朝の可視世界への偏重と合理性に対するワイルドの精神の反逆である。対象を見る視線が固定していないのは、意識が内へ向かえばダンディズムとデカダンスになるが、意識が外へ向かうとベシズムに向かうことを暗示している。

## 4. 複眼思考

ワイルドは自我の多元性と同時に言葉の多元性・言葉の力を「喜劇」の中で駆使している。ちょうど外部に対して片眼しか開かず、もう一方は盲目の眼のごとく自分の「深い淵」を見つめる複眼思考のように展開する。つまり機知と逆説を用いることで石化した感受性に異常を異常と感じさせる。視点を自由に交えることで正常という名の心の貧困を諷刺パロディ化している。

## 5. 視線の盲点

「童話」の中では、肉眼で見えると思うのは錯視・錯覚であるということ、心次第でいかようにも見えるという話を展開している。その論法はエディプス王や預言者(より見える人)のそれのように。具体的にその多くは人間の眼で見るのではなく物に人格(ペルソナ)と眼を与えることで人間の視線の盲点をつくわけである。

美を追求する仮面のダンディとして、ワイルドはその武器に言葉の機知と逆説を用いる。が、さらに強力な武器は言葉以上に心のおいを示す視線の作法にあったのではないだろうか。  
(玉川大学助教授)